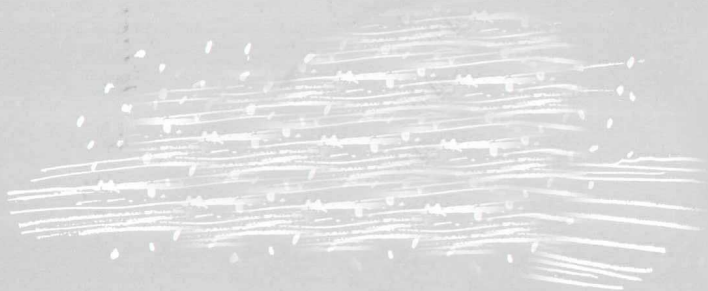


砂元燃



檀 一雄

燃える砂

定価一四〇〇円

昭和六十一年二月五日 印刷
昭和六十一年二月二十日 発行

著 者 檀 だん 一 かず 雄 お

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

●一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
●五三〇 大阪市北区堂島
●八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
●四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版 製本 大口製本

燃える砂

目次

花	84					
黒死の町		66				
島々			54			
汗と涙				42		
稲妻					30	
月と浜と唄						18
波の上						7

禽獸

102

大いなる流れ

114

魚と水

126

逃げ水

138

吹雪の地図

150

灯ともし頃

162

烈日

174

漂う人

186

いずこへ

198

疾風

211

雪と砂

223

橋

235

降り積む花

248

燃
え
る
砂

装
幀

熊谷博人

波の上

アメリカの貨客船「フロリダ号」の甲板の手摺につかまりついたまま、波の間に揉まれるようにして沈んでゆく真ッ赤な入日の有様に、ジッと眺め入っている男がある。

ロー、ロー、ロー

ユーア、ポート

と、なにやら低い声で英語の歌を歌っているが、どうやら日本人のようだ。

日本人と言うより、木の幹につかまりついた野生の熊のように見える。

ポウポウの髭。ヨレヨレの服。

その目は燃え沈む太陽に向ってまともに開いているが、ほんとうは、彼の目に何も見える筈がない。

ロー、ロー、ロー

ユーア、ポート

をもう一度、低く口ずさんでいると思ったら、その分厚い唇がにわかにゆがみ、男の眼の中から、キラキラと睨つき

上げるような涙があふれ出してきた。

一筋……。いや、二筋……。

入陽雲の残照を浴びて、その涙が不思議ないろどりを見せているのに、男は、自分の手で、流れ落ちる涙さえ、拭おうとはしない。

めくれたつように揺れていた波は、いつのまにか光を失って、あたりは次第に暗くなってきた。

それでも、まだ熊男は、そのまま化石にでもなってしまうように、手摺にしっかりとしがみついたまままだ、不意にうしろから、

「ちょっと、旦那……」

と言う声がした。ようやく、男は自分に呼び戻されたように、後ろを振りかえって、相手の姿に気がついたようだ。

「なんだ？」

と、太い地声は、すこしばかりしわがれて聞えている。

「釜揚げになったでよ。喰うベエか？」

「カマアゲ？」

「へへ……、メシで、メシ……」

呼びかけた男は、ようやく安堵した面持ちだ。しかし、相手は、

「有難う」

とうなずいただけである。相変らず、動き出す気配がないから、

「下に降りねえですか？」

ともう一度、熊のような男をうながしてみたが、

「そうだな……」

ハッキリしない。

呼びかけた男は、業を煮やしたように、

「まさか、このまま、ドボーンじゃねえだろう？」

相手の気づかっている意味合がようやくのみこめたのか、

「ワハハハ……」

熊のような男は、体をゆすぶって愉快そうに笑い出した。

「有難う。すぐに行くよ。先に降りて、喰べておきなさい」

又候、海に眺め入る気配だから、呼びにきた男は、気を抜かれたあんばいで、

「じゃ、ね」

スゴスゴと狭い昇降口の方に向って、ひき返していった。

貨客船「フロリダ号」のきかない三等船室の中では、先ほど、熊のような男に向って呼びかけた若者が、落着きなく毛布をひろげて、相手を待ち受けている恰好だ。

相手は、いつまでたっても、おりて来る気配がない。

が、ようやく、海がまっ暗にでもなってしまったのか、例の男が、ノッソリと、熊のような風態よろしく、狭い階段を降りてきた。

「ここだ。ここだよ」

若い男は、まるで生き返ったように、暗いランプの灯りの下で、右手を高くあげながら振っている。

「旦那の信玄袋もここへ運んどいたぜ。ここが一番、用心がよさげだから……」

不思議なことを言う。それでも、立って、毛布の皺をのびしながら、相手を迎える様子には、俄下男にでもなったような心意気が感じられた。

「やあ、有難う」

と熊男は、気楽そうに、靴をぬいで、その毛布の上にアグラを組んだ。

そのまま、二人は差し向いになる。

「ところで、旦那の本名は、何て、言うだね？」

「ワシの名か？ 横山……。横山勇造と言う名だが……」

熊が答えると、

「ああ、ヨコヤマユウゾウか……。そいで、あっちのショウベエは？」

「あっちのショウベエ？」

と熊男は相手の訊いている意味合が、よくのみ込めない様子である。

「商ベエだよ、商ベエ。日本でやってた商ベエのことさ」

「ああ、その商売か……」

相手の訊いている意味がようやくのみこめたあんばいで、

「それなら、新聞記者だ、新聞記者……」

「ワハハ……」

と若者の顔を眺め直しながら、笑い出す。

「オラー、またてつきり、デカかと思っただぜ」

「デカ？ 刑事のことか？ また、どうして？」

「だって、オメエ。そんな立派な風つきをしてよ、三等のザラ場にヘエリ込んでくるなんて、オレをショッピキに来たわけじゃ、ねえのかい？」

「ワハハ……、貴様をしょつびく？ そりゃ、いいなあ。貴様をしょつびいて、一体何をやらかせばいいのかね？」

熊男は、やっと人心地ついたように、愉快そうに体をゆすぶって、笑い出したが、

「気の毒だが、反対だ。やっと牢屋を、出たばかりだ」

「な、なんだって？」

相手の男は飛びあがるようになりながら、

「ほ、ほんとかよ？」

「ああ、ほんとうだとも。しかし、牢屋の中にしゃがみ込んでるのも、満更、悪い気分じゃないぞ」

何を思い出すのか、横山と名乗る熊男は、静かに、目をつむるようにして言っている。

相手の若者は、アッケにとられた様子である。

よほどびっくりでもしたのか、坐り直した挙句、熊男の髭につくづく見入りながら、

「へえー、おそれ入りやした。それで、先生は、いつてえ、どこにお出でなさる？」

にわかに、先生呼ばわりになった。

「ああ、今度はホノルルに行くつもりだけど……」

「おっと、ホノルル？ ホノルルにずっと居つきなさる？」

「まあ、そう言うつもりだがね。しかし、つもりは今まで、アテになったタメシがない」

「でも、まあ、当座は居つきさるんでがしょう？」

「まあね」

「だったら、ひとつ、折り入ってお願え申します。オレはあつちの様子が皆目心細エんで……。何かと、面倒を見て、貰えねえでがしょうか？」

若い男はいよいよかしこまって、膝の上に両手をついている。

「出来ることなら、何でも力になってあげようけど……。しかし、オレの方がよっぽど頼りにならんのかないかね……。どだい、君は、何しに行くんだね？」

「ア、アッチにですかい？」

「ああ」

「ダ、大工だけんどもね……」

「なんだ。大工なら、大忙がしだろう。きっと喜ばれるぜ、移民の連中から……」

横山と名乗る熊男は、頼もしそうに、相手の若者の両手と

指先を眺め直した。その視線をでも感じるのか、若い男は、いそいで両手を太腿の横にかくしたが、

「ダ、旦那。旦那はほんとうに、警察の方じゃねえだろうな？」

「どうしてだね？」

「いやなに、実は正直言っちゃうけどさ、オレは、こ、これなんですよ」

まわりを見まわしながら、若者は人差指の指先を曲げながら鉤をつくってみせた。

「なんだ？ それ？」

「ス、スリでさあね。バクられそうになっちゃったんで……。ハワイの、オバゴのところにかくまって貰って、お袋から言われたでしょう……。おまけに、虎ホームってんで、この船に、あぶなく乗り損いそうになっちゃって、泡喰ったよ……」

若い男はまわりを見まわしながら、せっかちに、乗込みまでのイキサツを語っていたが、相手の熊男の、悠揚迫らない姿に気がつくのと、

「セ、先生。オ、オレがスリだと知って、オレを見棄てねえでおくんなさいよ。やっとこ波の上まで逃げのびてきたんだからさ、もういいと思って、プチまけただけなんだから……。先生、もう、やんねえよ。金輪際悔い改めたよ。その証拠に、こ、これ、お返しします」

珊瑚のカンザシのようなものを取り出した。

「なんだ？ これ」

と熊男がいぶかしくのぞき込むと、

「ほれ、お連れさんの、あのお方が頭に挿していた……」

それは見事な銀のカンザシであった。

アタマに赤い珊瑚の珠をさしぬきになっている。

若い男は、その珊瑚珠銀釵を、所在なげにゆすりながら、「あのお方から、悪いと知ってて、ちょっと拝借しちゃったんで……。先生、何卒お納め願えます」

面目なげにそう言った。

今しがたまで、物に動じないように見えていた熊男も、さすがにこれには、ちょっと、びっくりしたようだ。

「なんだって？ 三千代が頭に挿していた？」

「へえ、そうなんです。だって、まさか、先生のものは盗れねえと思ったんですよ。ほんとだよ。先生のものは、ただけねえ。それにしちゃ、矢鱈とこう……。淋しい気がしてきちゃって……。オレはほんの出来心。いや、出来心なんてもんじゃねえ。だって、もう日本の見納めでがしょう？ その形見にさ、あのお方のモノを、ちょっとお借りしとこうかと思っただけ……。いんや、思いもしねえのに、ついつい手の方がすべっちゃったんですよ。先生。カンペンしておくんなさい。まるくおさめておくんなさいよ」

若い男は、今にも泣き出しそうな声をあげながら、その珊瑚のカンザシを、熊男の手の中にねじり込もうとするようだ。熊男の方は、屈強な毛むくじやらの腕に似合わず、一たん臆病そうに、その手をひっこめた。

「そ、そりや、君。オレが預るもんじゃない」

「先生……。そ、そんな邪険なこと言わないでおくんなさい。オ、オレの立つ瀬がねえよ」

若い男は、とうとう、ほんとうの涙声になって、

「このまま、海にはまり込めてんですか？」

熊男は相手の涙声に聞き入りながら、その場の処置に弱りきったように、一ツ、二ツうなずいてみたりしていたが、

「たしかに、三千代のものなんだね？」

「三千代って言いなさるか、船まで先生を見送りに見えてた、あのお方の、おグシのもんに間違えねえ……」

「そんなら、しばらく預っとくか……」

ようやく、分厚い唇をふるわせながら、うなずいてみせた。

「有難てえ。じゃ、先生。シカとお納め願えやす」

若い男は小おどりするようにのりだして、そのカンザシを熊男の手に握らせながら、

「もう、金輪際、悪いことはいたしやせん」

「ほんとに、オレが預っていいもんかどうか……」

「冗談じゃねえ。先生にお預り願わねえじゃ、オレは罪亡ぼしに、カンザシもろとも、ドボーンだ」

「アハハ……。まあ、どうでもいいこったけども、人の持物を、あんまりゾンザイに扱うと、あとで自分で嫌気がさしてくるだろう。それより、折角、大工と言う修業をしたんなら、その方で立派な仕事をして貰いたいな」

「わかりやした」

相手の男は真顔になって、ビョコーンとひとつ、頭を垂れた。

「旦那……。旦那のことを、今っから本気にセンセイって呼ばせておくんなさい」

と、大工だか、キンチャク切りだか、ややこしく自己紹介をした若者が言った。

言いながら、ケットウの上に、両手をついて、もののしいお辞儀になったが、指先がそのケットウの皺を無意識に掻き分けているのは、日頃のスリ稼業からくる指先さびしさかわからない。

「ああ、何とでも呼びなさい。しかし、たいして役に立つ男じゃないよ、オレは……」

と熊男が答えている。

「申し遅れやした。手メエの名は、下部正吉。これでも、ネシヨ吉って言ったらば、ちったア知られた顔でござんす」

下部正吉を名乗った若い男も、やっぱり、ちよつとばかり、自分で威勢をつけてみたかったのだろう。

熊男の方は、さっぱり反応を示さない。船室のランプの光の中で、珊瑚のカンザシを手持無沙汰にいじくりまわすだけで、

「ネシヨ吉ってのは、寝小便のことかね？」

「先生にそう言われちゃ、身も蓋も無え。だけんどもよ、アッシの商ベエは、気根の要る仕事でよ。いつも神経がビーンと張りつめっぱなしでよ。一仕事終つちまつた後に、一ベエやらかして寝込むとき、ついつい洩らしちゃうってことになるまसानね。だけんども、先生。洩らした翌る日が、一等冴えちまうんだな。百に一つ、仕損じが無えんですから……」

年の頃は二十二、三か。青みばしっている。が、どこかの筋が一、二本はずれてしまったような珍妙なオカしさが入りまじった顔だ。

キラキラとその眼が輝きつものってくるような清らかさの中に、何となくナメクジでも這っていきそうな不安もあった。

「何だって？ 寝小便を洩らした後に、何が冴えるんだって？」

「先生もお人が悪いや。ついつい、シャバの話をしてたんですよ。シャバの話……」

「アハハ……、もうあんまり、洩らさず、冴えず、オレの掘立小屋でもつくって貰おうか」

熊男がゆつたりと笑っている。

「わかりました。もう、ネシヨ吉は洩らさねえ。お天道様を

まともに見上げて、働いて、働いて、みますから……」

「まあな。ほどほどにやって貰わんと……」

熊男は、手にしたカンザシの珊瑚の珠で「二度、自分の頬つたをひやつこく撫でまわしていたが、

「有難う。あらためてお礼を申し述べる。これは何よりも有難い預りもんだ。お互い、しつかりやろう」

そう言って、その赤い珠を押しただいてみせた。

この広い地上（いや、洋上？）で、唯今私が物語っている二人の男ほど、奇妙キテレツな組み合わせは少いように思われる。

例の熊のような男の名は、横山勇造。

今しがた、スリのネシヨ吉に、

「オレは牢屋の中に半年しゃがんでたことがあるぞ」

と喋っていたが、ほんとうは二年間、牢屋の中にしゃがみこんでいた。

と言うのは、二十歳そこそこの頃、横山は自由民権運動でひつつかまり、未決のまま二年間入牢していたのだが、あとで六カ月の禁錮刑を言い渡され、未決加算（？）で放免されたわけである。

実際は二年牢屋にしゃがみこんでいたのに、半年と言いつめたのは、ネシヨ吉をあんまりビックリさせない為の、熊男の思いやりだろう。

横山と言う熊男は元来が、そんな男なのである。

黙ってドエライ事をやってのけるのに、大袈裟な言いまわしを好まない。

ニコニコと笑って、相手の思うままにまかせておく。

ネシヨ吉は、なんとなしに、熊男の妻みに気がついた。底力に気がついた。

「待てよ、先生。そうだ、いいもんがあったぜ」

信玄袋の中をかきまわしていたが、小さな風呂敷包を取り出した。その結び目をほどき、中から竹の皮にくるみこんだものをひっぱり出すと、

「餅だよ、餅。おフクロが焼いてくれたオカチンだから、ひとつ、先生。兄弟のヨシミだと思って、この餅でも喰って貰うべえか」

醬油の焼餅のようである。

「さあ、先生……」

「そいつは、有難い」

熊男は体をゆさぶりながら、その餅を喰べはじめたから、ネシヨ吉もようやく安堵の面持ちで、自分でも齧り、

「ちったあ、固いけんどもよ」

「いや、うまい。おフクロさんの手焼きだと聞いたから、なおうまい」

「有難てえ。おフクロが喜びますぜ。時に、先生。あの、波止場の見送りのお方は、先生の奥さんで？」

「いや、違う。女房は……、死んだ」

と、さすがに熊男も冴えない声だ。

「アレ、お亡くなりで……。この頃のことですかい？」

「そうだ」

「そいじゃ、あの、お子様は？」

「二人いる」

餅をくわえこんだまま、熊男の髭ヅラが急にふくれ上ったように見えてきたから、ネシヨ吉は、もう訊くのをやめた。

船が心持、揺れはじめてきたようだ。

ガランと暗い船室のあっちこちに散らばっている相客達は、中国人も、韓国人も、二、三人の日本人も、みんな寝ついてしまったようだ。

ネシヨ吉が、餅をにぎりしめたまま、俄にガックリとうなだれた。船酔いのようである。

横山は、その背を静かにさすってやりながら、

「寝るがいい。寝るが……」

黒い夜の波をかきわけながら、「フロリダ号」は、もがくドブ鼠のようにホノルルに向っている。

横浜から船出して、丁度十二日目。

「見えるぜ、見えるぜ」

「着いたぜ、着いたぜ」

大騒ぎをしながら船室に駆け降りてくる日本人の声がある。

「オイ、着いたそうだ……」

と熊男の横山は、信玄袋にしがみついて眠っているネシヨ吉の肩のあたりをつついてみた。

「ウ、ウ、ウ……」

とネシヨ吉は息絶え絶えの声をあげながら、鎌首を持ちあげようとしてみたが、すぐにまたガックリとうなだれて、信玄袋にしがみついてしまっただけだ。

仕方がないから、横山は、自分一人だけで、暗い昇降口を、上甲板の方に向って昇っていった。

生暖い海の風だ。

ほんのりと空が明けかけている。

なるほど、行手にあたって、島影が見えてきた。島の山のいただきのあたりにだけ、赤い朝の光がにじみついている。

あれは、ダイヤモンド・ヘッドか？

「うーむ。今度はひとつ呼んでやるかな」

と横山は、不思議なひとりごとをつぶやきかけたが、

「いかん、いかん。ロー、ロー、ロー、ユーア、ボート」

終りの方は、いつもの歌になった。

赤いカンザシの誘惑だ。誘惑じゃない、未練である。

実は二夜を一緒に過ごした、築地の女だが、思いもよらず、

「アタシ、送って行くわよ。いい？」

「いかん」

「とおっしゃっても、アタシ送っていくんだから、仕方がな

いでしょう」

そのまま、船の棧橋まで見送りについできた。

明石三千代。

船が出れば、それだけのことである。恋しいけれども、それだけのことにしよう、と横山は堅く決心していたのに、まったくヒヨンなことがあるものだ。

ネシヨ吉と言う、スリだか、キンチャク切りだか、知らないが、当の三千代の珊瑚のカンザシを抜き取って、それがまた御丁寧に、おなじ船底に揺られながら、ホノルル行きだと言うのだから驚き入った。

お蔭で、三千代のカンザシは、自分の手に廻され、まるで、三千代から、因果をふくめて手渡された結納の品のあんばいだ。

洋服の上着の内ポケットにしまっているが、十日の間、こっそり手にさわってみたり、暗い船室の灯りの中で、その赤い珊瑚にそっとのぞき入ってみたりしているうちに、血の通う、三千代そのものの心のような、体のような、愛着が感じられるようになってきた。

「いかん、いかん」

と横山はあわてて、口ごもりながら、船室に取つかえす。

「着いたゾ……。ホノルルだぞ……」

ネシヨ吉の耳許に大声をあげるのである。